

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第741集

# 令和4年度発掘調査報告書

## 西根遺跡

ほか調査概報（8遺跡）

2023

（公財）岩手県文化振興事業団

# 令和4年度発掘調査報告書

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、令和4年度に当センターが発掘調査を実施した全遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。令和4年度は、全県下で9遺跡、72,041㎡が調査され、縄文時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました各事業者、地元教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和5年3月

公益財団法人岩手県文化振興事業団  
理事長 石田知子

# 目 次

令和4年度発掘調査の概要 .....	1
--------------------	---

## I 発掘調査報告

(1) 西根遺跡（金ヶ崎町） .....	5
----------------------	---

## II 発掘調査概報

(2) 中林下遺跡（奥州市） .....	23	(6) 境遺跡、山下遺跡（奥州市） .....	27
(3) サンニヤⅢ遺跡（洋野町） .....	24	(7) 中平遺跡（野田村） .....	28
(4) 天ヶ沢遺跡（花巻市） .....	25	(8) 太田林遺跡（釜石市） .....	29
(5) 滝大神Ⅰ遺跡（花巻市） .....	26	(9) 岡田遺跡（北上市） .....	30

## 報告書抄録

西根遺跡（金ヶ崎町） .....	31
------------------	----

## 令和4年度発掘調査の概要

令和4年度の発掘調査は、当初計画8遺跡、面積79,627㎡でスタートし、途中、奥州市の境・山下遺跡が新規に追加されたことにより、最終的には8件9遺跡、72,041㎡が対象となった。前年度の実績と比較すると、総数で2遺跡減少したものの、調査面積はおよそ2倍となっている。今年度は、県央部および沿岸北部地域の4市2町1村に所在する各遺跡を調査したが、これらの事業内容は、令和2年度で一区切りが付いていた三陸沿岸道路に関わる1遺跡を含む道路建設4遺跡、農業基盤整備2遺跡、市町村からの受託が3遺跡である。

はじめに旧石器時代であるが、北上市の岡田遺跡から石刃の出土をみた石器集中区が1箇所確認された。剥片を主体とする出土総点数は、およそ100点を数える。

次に、縄文時代の遺跡として、釜石市の太田林遺跡を取り上げる。橋野川（鵜住居川）に流れ込む横内川右岸に立地するこの遺跡からは、縄文時代早期中葉から前期末葉にかけての竪穴住居が20棟以上重なり合っで見つかった。この他には、住居よりも新しい墓も確認されている。遺物では、玦状耳飾と呼ばれる石製品が数多く出土し、中には未成品が存在することから、アクセサリーの製作工房を兼ねる住居が存在したと考えられる。また、貯蔵穴のひとつからは炭化した堅果類（クリ）が出土し、往時の食に関する資料も得られた。この他、野田村中平遺跡では早～前期の竪穴住居群が、洋野町サンニヤⅢ遺跡と北上市岡田遺跡では、狩猟用の陥し穴状遺構が見つかった。特に、岡田遺跡での検出数は320基を超え、複数の陥し穴状遺構が配列される事例も数箇所認められている。

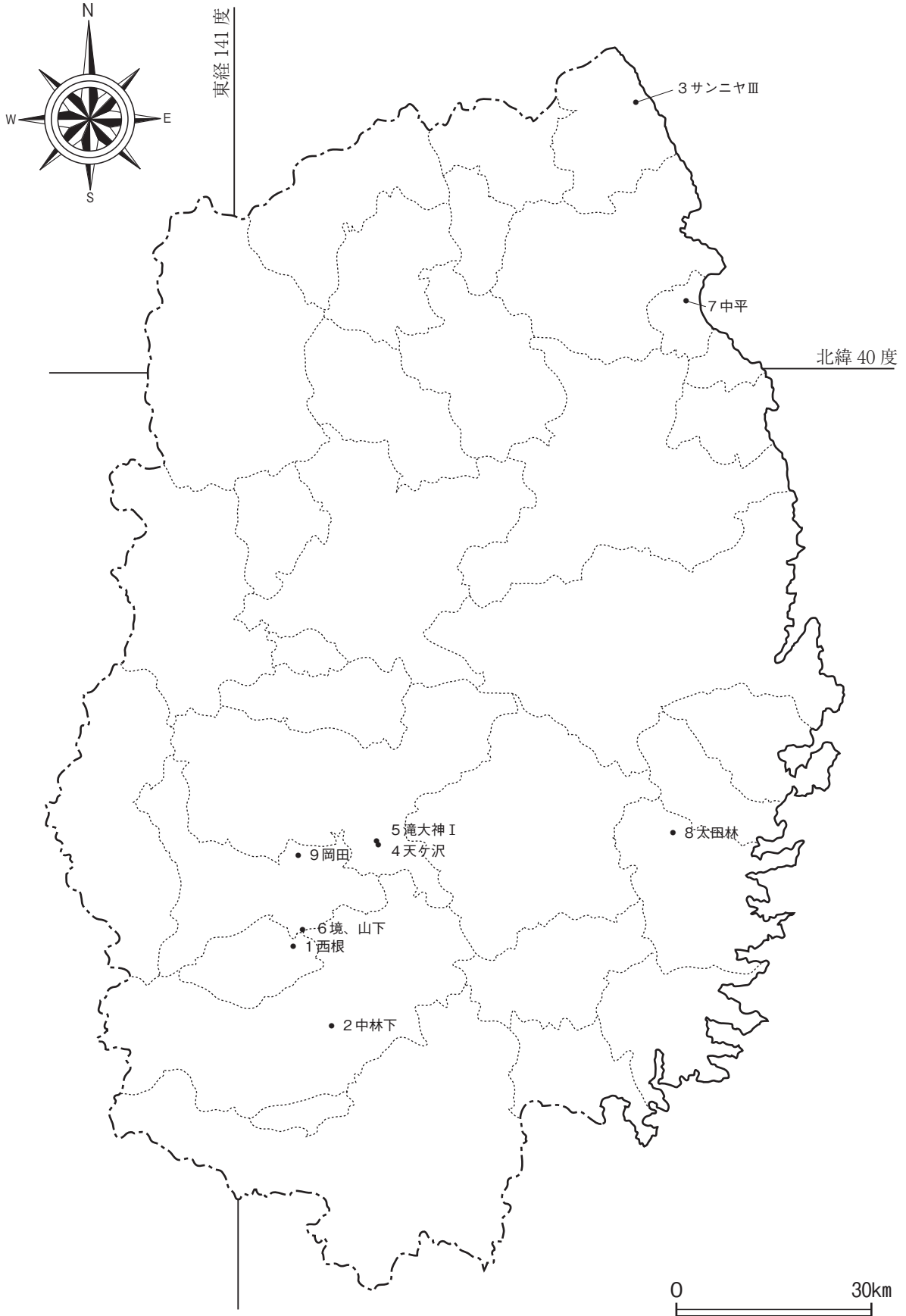
花巻市天ヶ沢遺跡では、弥生時代中期を主体とする土器が埋没した沢からまとまって出土した。上層には平安時代の遺物包含層もあり、この2時期の竪穴住居や土坑などの遺構の存在が想定される。

続いて平安時代では、ここ数年調査が実施されてきた奥州市中林下遺跡、金ヶ崎町の国指定史跡「鳥海柵」の隣接箇所である西根遺跡、そして前述した岡田遺跡および境・山下遺跡、県指定史跡「野田竪穴住居跡群」の北東に隣接する中平遺跡の5遺跡が該当する。中林下遺跡は、9～10世紀代の竪穴住居及び竪穴状遺構と掘立柱建物が主体となる遺跡であるが、今回は新たに12世紀後半の掘立柱建物と土坑が確認されたことから、この周辺に平泉藤原氏に関連する居館等があった可能性を残すこととなった。中平遺跡からは、平安時代9～10世紀代の竪穴住居44棟が確認され、鍛冶関連施設の存在や人為的に埋め戻される住居が多いことなどが特徴として挙げられる。このうちの1棟からは、石帯と呼ばれる腰帯（ベルト）の飾りが出土し、当時の役人が身に着けていた貴重品であることから、この地域に相当の有力者が存在したことが推測される。また、今回は東海産の灰釉陶器が周辺地域から初めて出土したことからも、沿岸域における平安時代の諸様相について再検討が必要となろう。この2遺跡のほかには、岡田遺跡で15棟、境・山下遺跡からは1棟の竪穴住居が確認されており、県央部から県南の北部地域にかけても、新たな成果を加えることができた。

最後に中・近世の遺跡では、中林下遺跡から16世紀後半以降の掘立柱建物や土坑・溝が、花巻市滝大神Ⅰ遺跡からは近世民家と思われる建物2棟が検出されている。

今年度調査を実施した8遺跡のうち、4つの遺跡が次年度も調査を継続することになっており、さらなる成果が期待される。今後の受託事業については、農業基盤整備や道路建設のほか、県内市町村の工業団地誘致等に係る調査などが予定されているが、これまで以上に緻密で正確な発掘調査を実施し、更なる文化財の保護と活用を図っていきたいと考えている。

（調査課長 濱田 宏）



報告遺跡位置図

数字は発掘調査概報報告番号と共通

# I 発掘調査報告

#### 凡 例

- ・本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。
  - 大コンテナ：42×32×30cm
  - 中コンテナ：42×32×20cm
  - 小コンテナ：42×32×10cm
- ・本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。  
(例) 竪穴住居跡→竪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝



## (1) 西根遺跡<sup>にしね</sup>

所在地	胆沢郡金ケ崎町西根縦街道南・原添下地内	遺跡コード・略号	ME96-2095・NN-22
委託者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	200㎡
事業名	一般国道4号金ケ崎拡幅	調査終了面積	200㎡
発掘調査期間	令和4年8月1日～9月30日	調査担当者	野中裕貴・杉沢昭太郎

### 1 調査に至る経過

西根遺跡は、一般国道4号金ケ崎拡幅事業に伴って、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

金ケ崎拡幅は、金ケ崎町内の国道4号の交通混雑緩和と交通安全の確保を図ると共に周辺の工業団地からの円滑な物流の確保、経済活動の支援等を目的とした、延長5.2kmの4車線拡幅事業である。

西根遺跡は岩手県教育委員会作成の県遺跡台帳に登録された周知の遺跡であり、昭和54年に金ケ崎バイパス事業に伴って調査済の箇所であるが、拡幅事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ねた結果、未調査範囲が存在する可能性があったため岩手河川国道事務所長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課総括課長宛てに、令和3年6月17日付国東整岩二調第6号「埋蔵文化財包蔵地の試掘調査について（依頼）」により試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた県教育委員会では令和3年7月21日に試掘調査を実施し、令和3年9月16日付教生第850号により追加調査が必要な範囲が確認されたことから再度協議を行うよう回答があった。

回答を受け協議を行ったところ、調査範囲を確認するための再調査が必要となった事から岩手河川国道事務所長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課総括課長宛てに、令和3年11月8日付国東整岩二調第33号「埋蔵文化財包蔵地の再試掘調査について（依頼）」により再試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた県教育委員会では、令和3年11月11日～12日に再試掘調査を行い、令和3年11月19日付教生第1101号により、調査範囲を変更した上で取扱いについて再度協議をおこなう事と回答がなされ、協議の結果、工事に先立って発掘調査が必要となったものである。

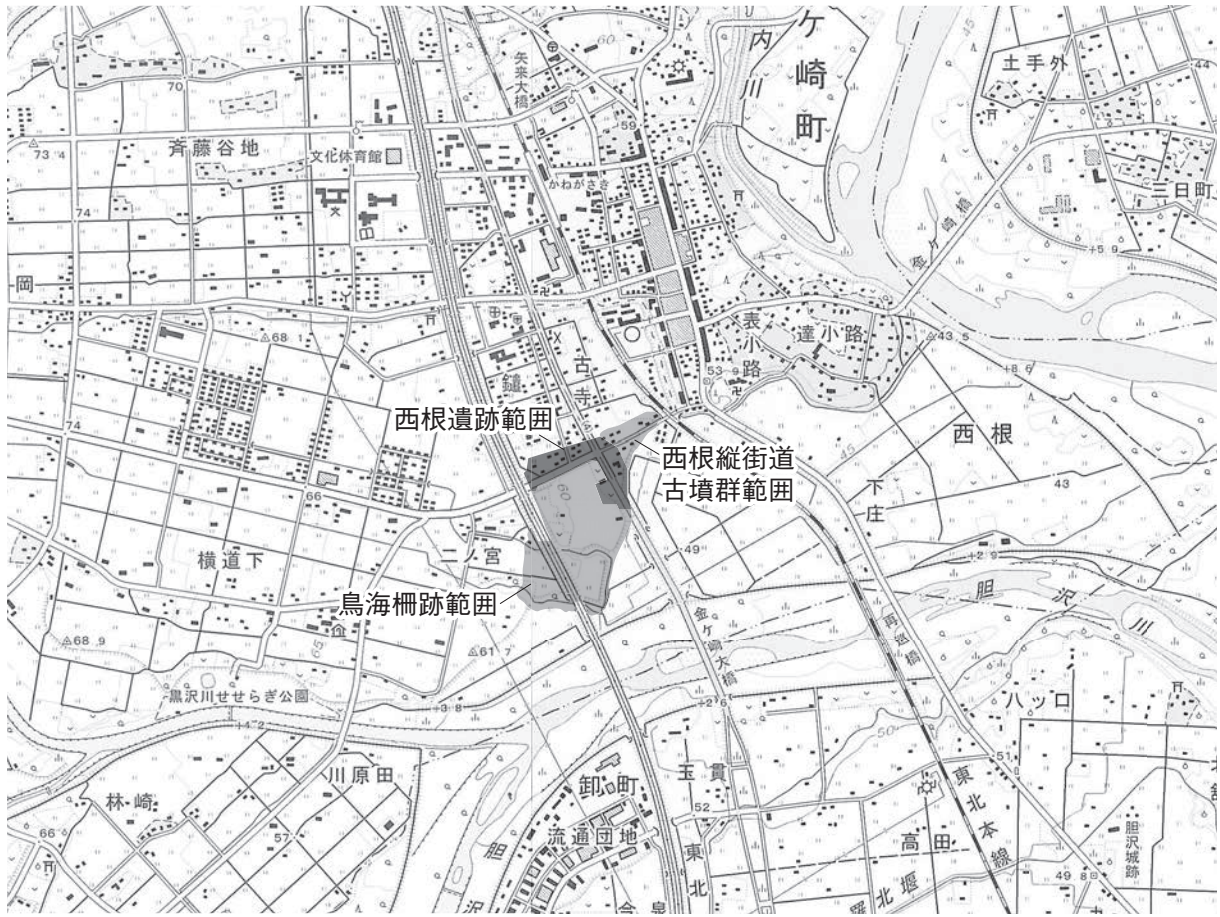
その結果を踏まえて、当事務所では岩手県教育委員会と協議を行い、発掘調査を公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。これにより令和4年7月29日付けで岩手河川国道事務所長と公益財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、西根遺跡の発掘調査を実施することとなった。

### 2 遺跡の位置と立地

遺跡は、JR東北本線金ケ崎駅から南に約1.0kmに位置し、夏油川により形成された六原扇状地（金ケ崎段丘）と呼称される低位段丘上の南東端の段丘縁に立地する。遺跡の南側には胆沢川が東流し、遺跡からさらに南東側に約2.4km離れた地点で、北上川と合流する。遺跡の南側と東側は段丘崖となっている。胆沢川左岸の氾濫原が広がる南側段丘崖下と遺跡がある段丘面との比高は約10mである。

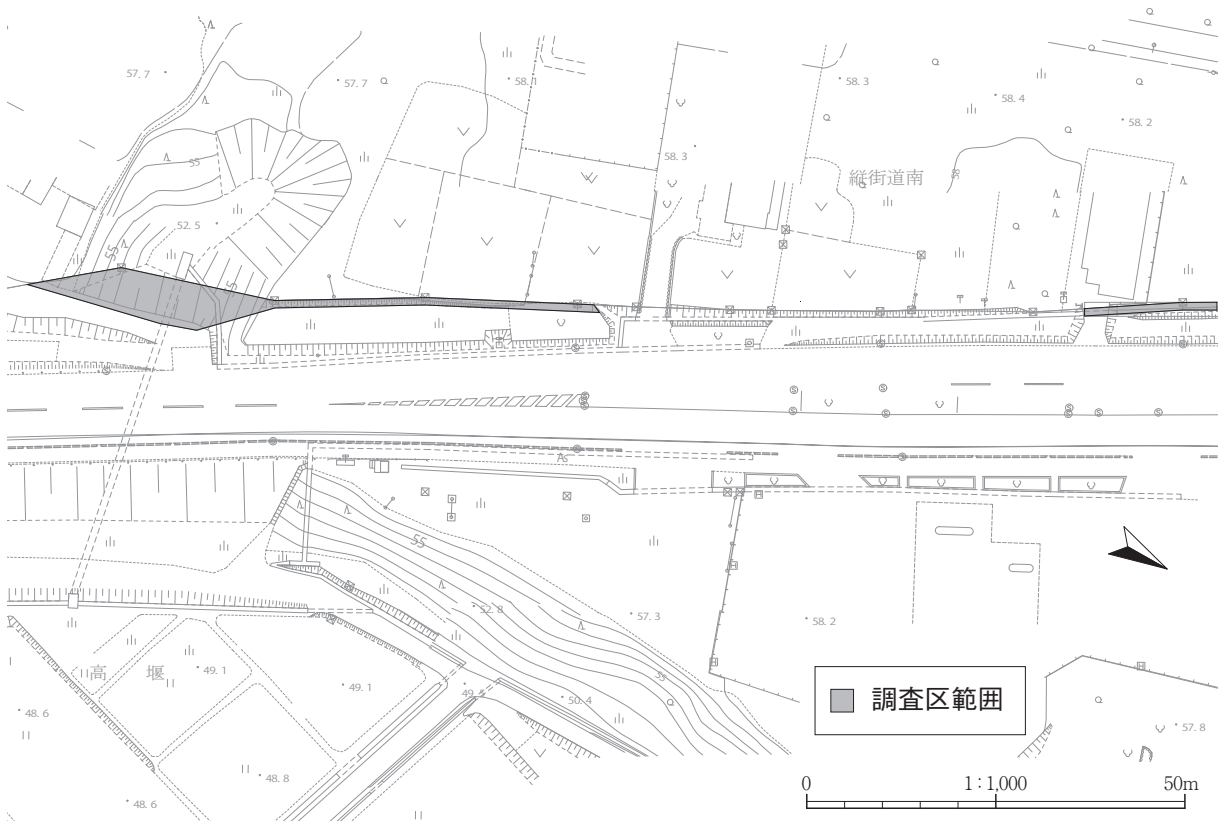
さらに、この段丘は、三条の沢により形成された開析谷によって四つの島状台地に区画され、北からそれぞれに「縦街道南」「原添下」「鳥海」「二ノ宮後」という古くからの地名（字名）が付けられた台地に分かれる。本遺跡が位置するのは、北側の「縦街道南」から「原添下」にかけてである。

(1) 西根遺跡



1 : 25,000 金ヶ崎・陸中江刺

第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺地形と調査区

調査区は、国道4号の西側に隣接する。昭和54年度に当センターが発掘調査を実施した調査範囲の西端にあたる。標高は、51～58m程で、南端に位置する開析谷と東側の段丘崖へ向かって緩やかに傾斜する地形である。遺跡の南側には『陸奥話記』等の文献に記された安倍氏の拠点「鳥海柵跡」(平成23年国史跡指定)、東側には明治30(1897)年に文学博士の三宅米吉氏により「最北の古墳」として報告された「西根縦街道古墳群」が隣接する。

### 3 西根遺跡の過去の調査履歴

本遺跡の発掘調査は、昭和33(1958)年に金ヶ崎中学校球技場の整地工事中に多数の土器が出土したことから、岩手大学教授の草間俊一氏を招き、指導を依頼したことが端緒となった。草間氏が校庭の遺物の出土状況を確認した際に複数棟の竪穴住居を確認しており、周辺の竪穴住居の分布調査を経て、発掘調査を実施するに至った経緯がある(草間・金ヶ崎町教育委員会 1959)。草間氏による調査は、昭和40(1965)年の第5次調査まで継続された(第1表参照)。

また、昭和34(1959)年には、草間氏とは別に、東北大学の伊藤玄三氏らによって西根縦街道古墳の古墳2基(第1・2号墳)が発掘調査されている(金ヶ崎町教育委員会 1960)。この2基については、大正12(1923)年にも宮内省諸陵寮調査員によって皇室に関する不明の古墳調査を目的として現地調査が行われ、蕨手刀や和同開珎、銚子金具などが出土したとの記載が同年の岩手日報の記事に残されている(金ヶ崎町教育委員会 2013)。出土遺物は、現在の東京国立博物館に収められている。

その後、東北縦貫自動車道・国道4号金ヶ崎バイパスの建設に伴い、昭和50年代には、岩手県教育委員会や当センターにより調査が行われ、平安時代の集落、奈良時代の古墳などが見つかった。前述した2基の古墳も当センターの昭和54(1979)年の西根遺跡調査時に再度、発掘調査された。この調査により、墳丘の外側に馬蹄形の周溝を伴う古墳の構造が改めて明らかとなった。

なお、大正末年頃の作成とされる鳥海柵見取図(当時、金ヶ崎村助役の大沼慶一郎氏が所蔵)(第3図)によると、鳥海柵の三の丸(縦街道南周辺)と称される区域に6基の古墳(図中①～⑥)が図示されており、その内の①・②と記された2基が調査を実施した古墳にあたる事が判明している。

第1表 西根遺跡の調査履歴

※西根遺跡として報告されたものを掲載。

No.	調査年次	調査原因	検出遺構	出土遺物	調査主体・調査担当者	調査報告書等	備考
1	昭和33年(1958)第1次	金ヶ崎中学校球技場建設	竪穴建物跡15棟(奈良)	土師器、須恵器、土製紡錘車、青銅製耳環など	金ヶ崎町教育委員会、岩手大学文学芸学部(協力)・岩手大学教授 草間俊一	草間俊一・金ヶ崎町教育委員会 1959『金ヶ崎町西根遺跡』 草間俊一 1960『岩手県のチャシと鳥海柵』『岩手史学研究』No.33	金ヶ崎中学校球技場の整地工事に多数の土器が出土し、岩手大学教授草間氏に指導を依頼。その後、分布調査を経て、発掘調査を実施。
2	昭和33年(1958)第2次		竪穴建物跡1棟(平安初頭)、沢跡	土師器、須恵器、鉄片など	金ヶ崎町教育委員会・岩手大学教授 草間俊一	草間俊一・金ヶ崎町教育委員会 1959『金ヶ崎町西根遺跡』 草間俊一 1960『岩手県のチャシと鳥海柵』『岩手史学研究』No.33	第一次調査からの継続調査。校舎正面の校庭を調査。
3	昭和34年(1959)第3次		竪穴建物跡16棟(奈良・平安)、竪穴状遺構1基、古墳2基(奈良)	土師器、須恵器、鉄製品、羽口、鉄滓など	金ヶ崎町教育委員会・東北大学教授 伊東信雄、岩手大学教授 草間俊一、(調査員)伊東玄三、佐々木博康、伊藤正	草間俊一・金ヶ崎町教育委員会 1968『西根古墳と住居址』金ヶ崎文化財調査報告書第1集	第二次調査からの継続調査。校舎裏の校庭を調査。
4	昭和36年(1961)第4次		竪穴建物跡27棟(奈良・平安)、竪穴状遺構2基、空濠	土師器、須恵器など	岩手大学文学芸学部	草間俊一 1962『金ヶ崎町西根遺跡—第四次調査を中心に—』『岩手史学研究』No.39	第三次調査からの継続調査。校舎裏の校庭を調査。
5	昭和40年(1965)第5次		竪穴建物跡17棟(奈良・平安?)、墓塚5基			報告書なし。『西根古墳と住居址』の「竪穴分布図」への掲載のみ。	調査期間・主体・担当者の詳細不明。第三次調査報告書の遺構配置図「竪穴分布図」に第四次調査と共に注記されているため、第四次調査と同様の調査組織の可能性あり。校舎裏の校庭を調査。
6	昭和50年(1975)	東北縦貫自動車道建設	竪穴建物跡8棟(平安)、竪穴状遺構2棟、沢跡2条、溝跡17条、ピット20基	土師器、須恵器、陶器、砥石、鉄製品、鉄滓、火葬骨など	岩手県教育委員会、日本道路公団・岩手県教育委員会事務局文化課	岩手県教育委員会 1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—X— 金ヶ崎地区』岩手県文化財調査報告書第59集	
7	昭和54年(1979)	金ヶ崎バイパス関連調査	掘立柱建物跡1棟、竪穴建物跡4棟(平安)、堀跡1条、沢跡1条、古墳4基(奈良)、溝跡8条、墓塚2基、周溝17基、ピット13基	土師器、須恵器、陶器、縄文土器、石器、刀子、錫製銅、水晶製切子玉、ガラス玉、土玉など	(財)岩手県埋蔵文化財センター	(財)岩手県埋蔵文化財センター 1981『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書(1) 水沢市玉貫遺跡—金ヶ崎町西根遺跡—』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第18集	

(1) 西根遺跡



※鳥海柵見取図：『岩手史学研究』No.33（華間 1960）より引用・加筆  
 写真：（財）岩手県埋蔵文化財センター 1981より引用

第3図 鳥海柵見取図と西根縦街道第1・2号墳

4 基本層序・グリッド設定

基本層序は、過去の調査を参考にⅠ～Ⅵ層の大きく6層に大別した。層位は、ローマ数字で表記し、必要に応じて細分した。層序の確認は、主に南側調査区のカクランによる影響の少ない箇所にトレンチを掘り、その壁断面を基準として設定した。遺構検出面はⅢa層上面である。

Ⅰ層：10YR3/1 黒褐色土 粘性やや弱 しまりやや疎 現表土

Ⅱ層：10YR2/1～3/1 黒～黒褐色土 粘性やや弱 しまり中 黒ボク土

Ⅲa層：10YR7/6 明黄褐色粘土 粘性強 しまり密

Ⅲb層：10YR7/4 にぶい黄橙色粘土 粘性強 しまり密

所々にⅢc層土が混じる。

Ⅲc層：10YR8/3 浅黄橙色粘土 粘性強 しまり密

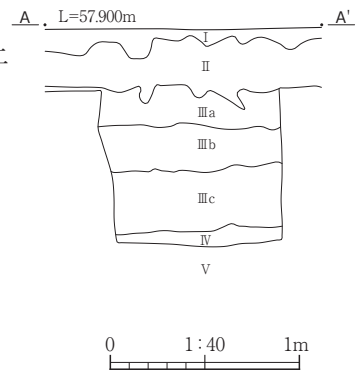
Ⅳ層：10YR5/2 灰黄褐色粘土 粘性強 しまり密

Ⅴ層：10YR7/2 にぶい黄橙色粘土 粘性強 しまり密

所々に酸化鉄の集積あり。

Ⅵ層：10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 粘性なし しまり密 段丘礫層

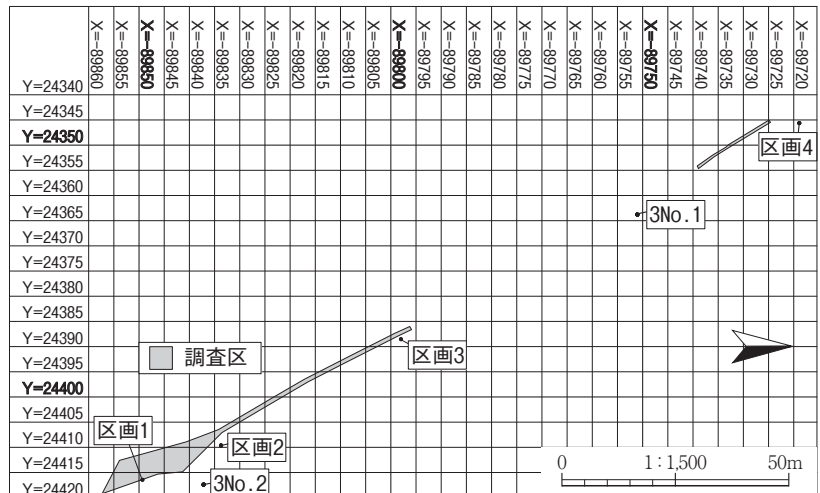
(第三沢で確認)



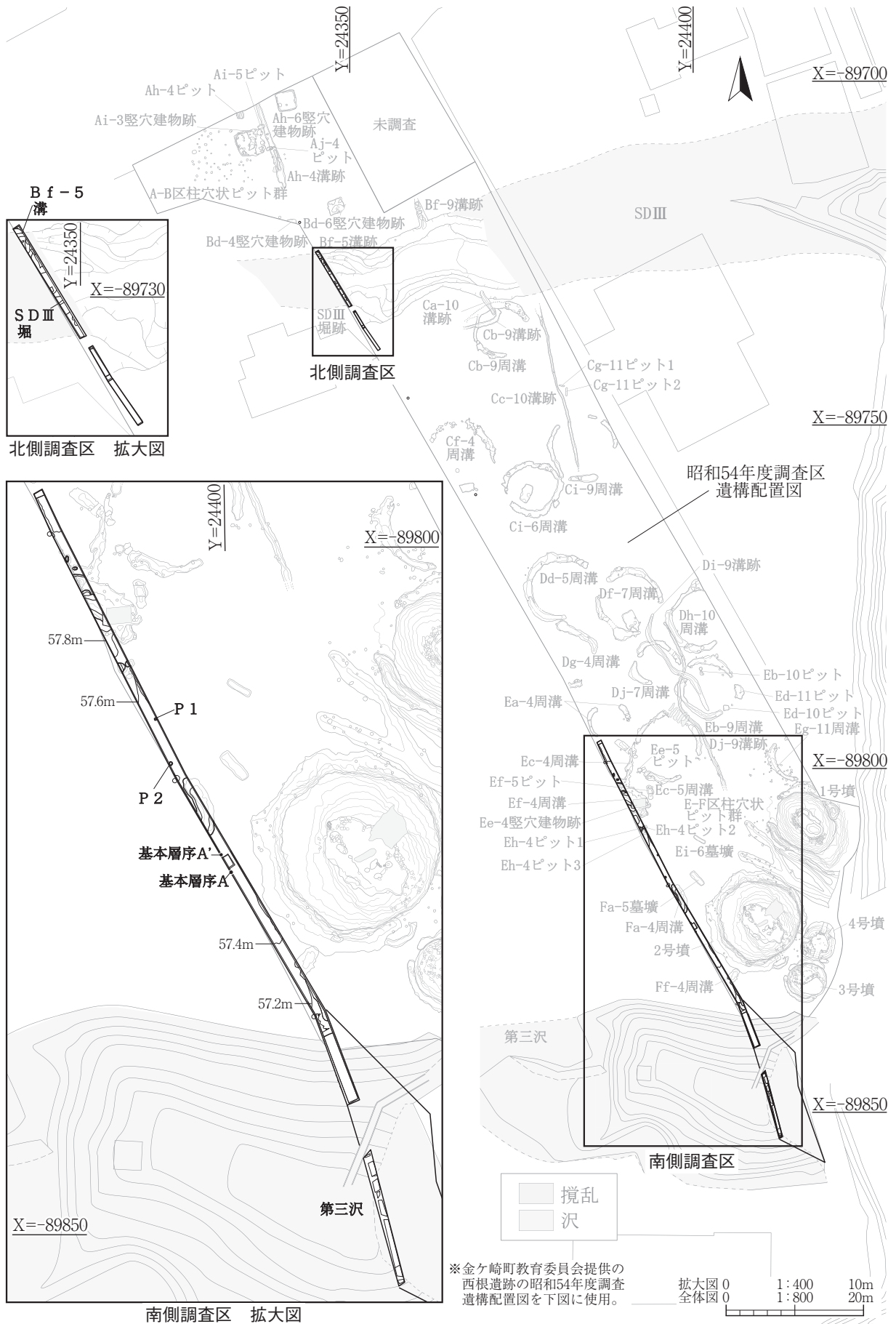
第4図 基本層序

グリッド設定は、平面直角座標（第X系：世界測地系）に合わせて、大グリッド50m、小グリッド5mで設定した。過去の調査のグリッド名を用いた遺構との混同を避けるため、グリッド名は付していない。電子平板測量に用いた基準点は、3級点2点と4級点4点の計6点で、それぞれの座標値・標高は下記のとおりである。

基準点名	X座標	Y座標	標高
3No.1	-89751.019	24363.868	57.612
3No.2	-89837.131	24417.474	55.986
区画1	-89849.290	24416.503	55.975
区画2	-89833.674	24409.702	57.513
区画3	-89797.942	24388.618	58.063
区画4	-89718.866	24345.691	58.386



第5図 グリッド配置と調査区位置図



第6図 遺構配置図

## 5 調査の概要

調査対象面積は、200㎡である。調査区は、南北2箇所に分かれていたため、便宜的に北側調査区と南側調査区と呼称して調査を進めた。両調査区共に西側に国道4号が隣接する他、東側が国指定史跡である「鳥海柵跡」の史跡指定範囲にあたり、重機等の乗り入れが困難な立地のため、掘削は全て人力で行った。また、第三沢の調査に関しては、掘削による道路や隣接地への土砂流出を避けるため、用水路等の構造物に支障のない範囲でトレンチ調査を進めることとした。過去の調査で報告された遺構は、報告時の遺構名を「跡」を略して使用し、新規に検出した遺構は、遺構検出順に命名した。

### 検出遺構と出土遺物

検出遺構は、堀1条、溝1条、堀の可能性のある沢1条、柱穴状土坑2個である。また、今回の調査で、昭和54年度調査時に検出した遺構（周溝・ピット）を再検出しているが、これらについては、前回調査で記録が行われ、埋土が失われていることから記載を割愛した。出土遺物は、平安時代の土師器、須恵器片各1点、表採した近現代の陶磁器片4点である。次に遺構毎に詳細を記載する。

#### SDⅢ堀（Bg-5堀）（第7～9図、写真図版3・5）

〈位置・検出状況〉北側調査区のX=-89730、Y=24350付近に位置する。黒褐色土のプランとして検出した。検出面はⅢa層上面である。埋土や図面上の位置を検討した結果、昭和54年度調査で検出したBg-5堀西側の続きであることを確認している。

〈重複関係〉Bf-5溝と重複する。Bf-5溝より古い可能性がある。

〈形状・規模〉東西方向に延びる堀と推測されている遺構である。壁はⅢa層を掘り込み、緩やかに立ち上がる。底面は段状で凹凸がある。規模は検出部分で推定幅10.2m、深さ105cmである。

〈堆積土〉炭化物や焼土粒を僅かに含む黒～黒褐色土が主体で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

〈遺物〉過去の調査で、12世紀末～13世紀前半の渥美窯産の播鉢（第9図）が出土。今回は出土なし。

〈時期〉詳細な時期は不明。過去の調査の出土遺物から平安時代には形成されていた可能性が高い。

#### Bf-5溝（第7～9図、写真図版3・5）

〈位置・検出状況〉北側調査区のX=-89725、Y=24345付近に位置する。黒褐色土のプランとして検出した。検出面はⅢa層上面である。埋土や図面上の位置を検討した結果、昭和54年度調査で検出したBf-5溝西側の続きであることを確認している。

〈重複関係〉SDⅢ堀と重複する。SDⅢ堀より新しい可能性がある。

〈形状・規模〉遺構南東側はSDⅢ堀に合流するとされる。壁はⅢa層を掘り込み、直立気味に立ち上がる。底面は段状で凹凸がある。規模は検出部分で推定幅2.5m、深さ80cmである。

〈堆積土〉炭化物や焼土粒を僅かに含む黒～黒褐色土が主体で、堆積状況から自然堆積と考えられる。

〈遺物〉土師器、須恵器片各1点が埋土から出土し、その2点を掲載した。1は土師器の高台坏（椀）の底部片である。ロクロ成形で、底面切り離しは回転糸切りである。内面はミガキ調整と考えられる。2は須恵器の甕の胴部片である。外面にはタタキが施され、内面には当て具痕が観察できる。

〈時期〉詳細な時期は不明。出土遺物から平安時代には形成されていた可能性が高い。

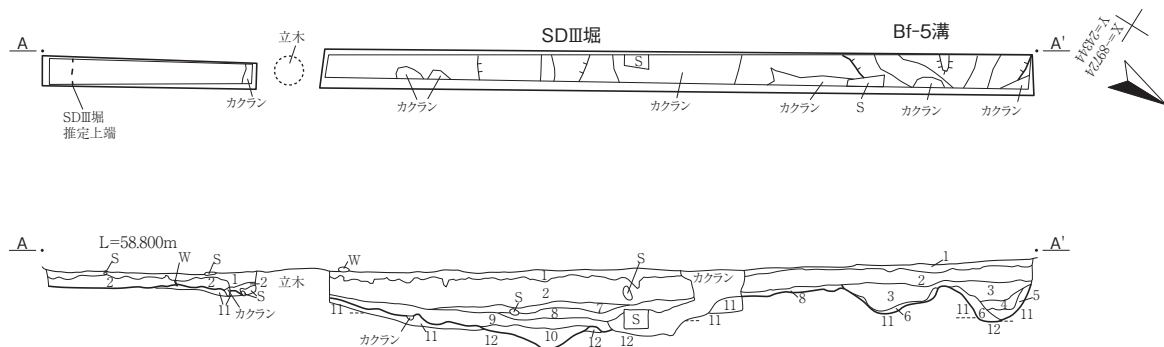
#### 第三沢（Ga-堀）（第10・11図、写真図版4）

〈位置〉南側調査区南端のX=-89835、Y=24405付近に位置する。昭和54年度調査で検出したGa-堀である。トレンチ調査を進め、断面観察により、人為的痕跡の確認を行った。

SDⅢ堀・Bf-5溝



SDⅢ堀・Bf-5溝 拡大図



SDⅢ堀・Bf-5溝

- 1 10YR3/1 黒褐色土 粘性やや弱 しまりやや疎 現表土 I層
- 2 10YR3/1 黒褐色土 粘性やや弱 しまりやや密 II層
- 3 10YR2/1 黒色土 粒状中 しまりやや密  
φ2~3mm炭化物1%混入 地山ブロック 塊状に3%混入
- 4 10YR2/1 黒色土 粘性やや強 しまりやや密  
地山ブロック 粒状に2%混入
- 5 10YR3/1 黒褐色土 粘性強 しまりやや密  
地山ブロック 塊状に10%混入
- 6 10YR2/1 黒色土 粘性強 しまりやや密  
地山ブロック 塊状に10%混入
- 7 10YR3/1 黒褐色土 粘性中 しまり中  
地山ブロック 粒状に1%混入
- 8 10YR3/1~3/2 黒~黒褐色土 粘性強 しまり密  
φ2~3mm炭化物、焼土粒1% 地山ブロック 粒状に1%混入  
3層との層界やや不明瞭

- 9 10YR2/1 黒色土 粘性強 しまり密  
φ2~3mm炭化物 φ1mm焼土粒1% 地山ブロック 粒状・塊状に3%混入
- 10 10YR2/1 黒色土 粘性強 しまり密  
φ1mm焼土粒2% 地山ブロック 粒状・塊状に5%混入
- 11 10YR7/6 明黄褐色粘土 粘性強 しまり密 IIIa層
- 12 10YR8/3 浅黄橙粘土 粘性強 しまり密 IIIc層

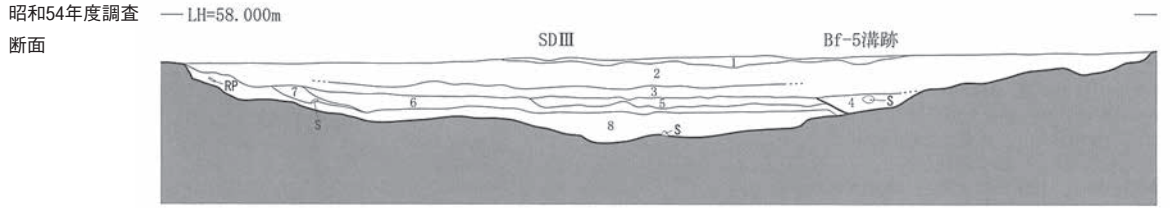
所々に側溝や擁壁工事によるカクランの影響を受ける箇所あり

※3~6層: Bf-5溝の埋土  
7~10層: SDⅢ堀の埋土

平面図(拡大)・断面図 0 1:100 2m  
平面図 0 1:200 4m

第7図 SDⅢ堀・Bf-5溝(1)

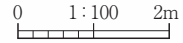
(1) 西根遺跡



SDⅢ、Bf-5溝跡土層

1. 10YR2/2黒褐色土。しまりあり。粘性ややあり。  
礫(指先大)僅かに、黄褐色粘土粒・明褐色土器片極僅かに含む。
2. 第1層より粘土粒少なく、炭化物粒僅かに含む。
3. 第2層より粘土粒・炭化物粒の粒子が大きい。第2層との境界は両端で不明瞭。
4. 10YR2/2黒褐色土。しまりあり。にぶい黄褐色粘土を含み、一部でブロック状になる。炭化物・小礫多量、明赤褐色土器片含む。Bf-5溝跡埋土。
5. 10YR2/3黒褐色土。しまりあり。粘性ややあり。  
黄褐色粘土粒(部分的に豆粒大)多量、炭化物極僅かに含む。
6. 10YR2/3黒褐色土。しまり・粘性あり。  
明黄褐色～黄褐色粘土ブロック(豆粒～親指先大)含む。炭化物粒僅かに含む。
7. 第6層より粘土を多量に含む。部分的に粘土面として観察できる。
8. 10YR2/1黒色土。しまり・粘性あり。粘土粒・炭化物粒・礫僅かに含む。一部地山粘土ブロック含む。

(金ヶ崎町教育委員会 2013) より引用  
※金ヶ崎町教育委員会で再検討した断面図



昭和54年度調査断面写真



(財)岩手県埋蔵文化財センター 1981) より引用

第8図 SDⅢ堀・Bf-5溝 (2)



第9図 SDⅢ堀・Bf-5溝 出土遺物

第2表 遺物観察表

( )は推定値、[ ]は残存値

番号	出土地点	層位	種別	器種	残存部位	計測値			色調	主な文様・調整・特徴		底部 切り離し	胎土	時期	備考
						口径	底形	器高		外面	内面				
1	Bf-5溝	埋土中	土師器	高台杯(椀)	底部	—	(6.4)	[1.7]	7.5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	ミガキ?	回転糸切後、高台貼り付	石英、黒色鉱物	10C後半～11C前半	
2	Bf-5溝	埋土中	須恵器	壺	胴部	—	—	[3.2]	N5/ 灰	タタキ	アテグ	—	石英、クサリ礫	平安時代	
参考資料	SDⅢ堀	埋土中	陶器	鉢鉢	1/5残存	(29.1)	(13.8)	[12.3]	10YR4/1 褐灰色	ハラケズリ	ナデ	高台貼り付	小礫、砂粒、白色粒	12C末～13C前半	渥美窯産 内底に使用痕あり

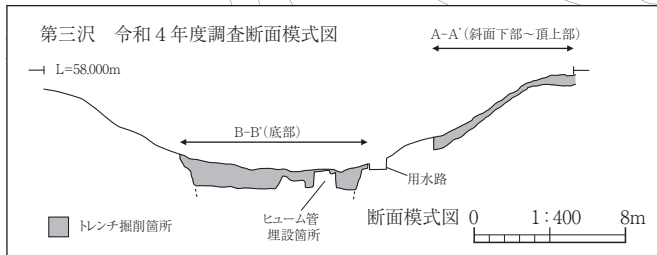
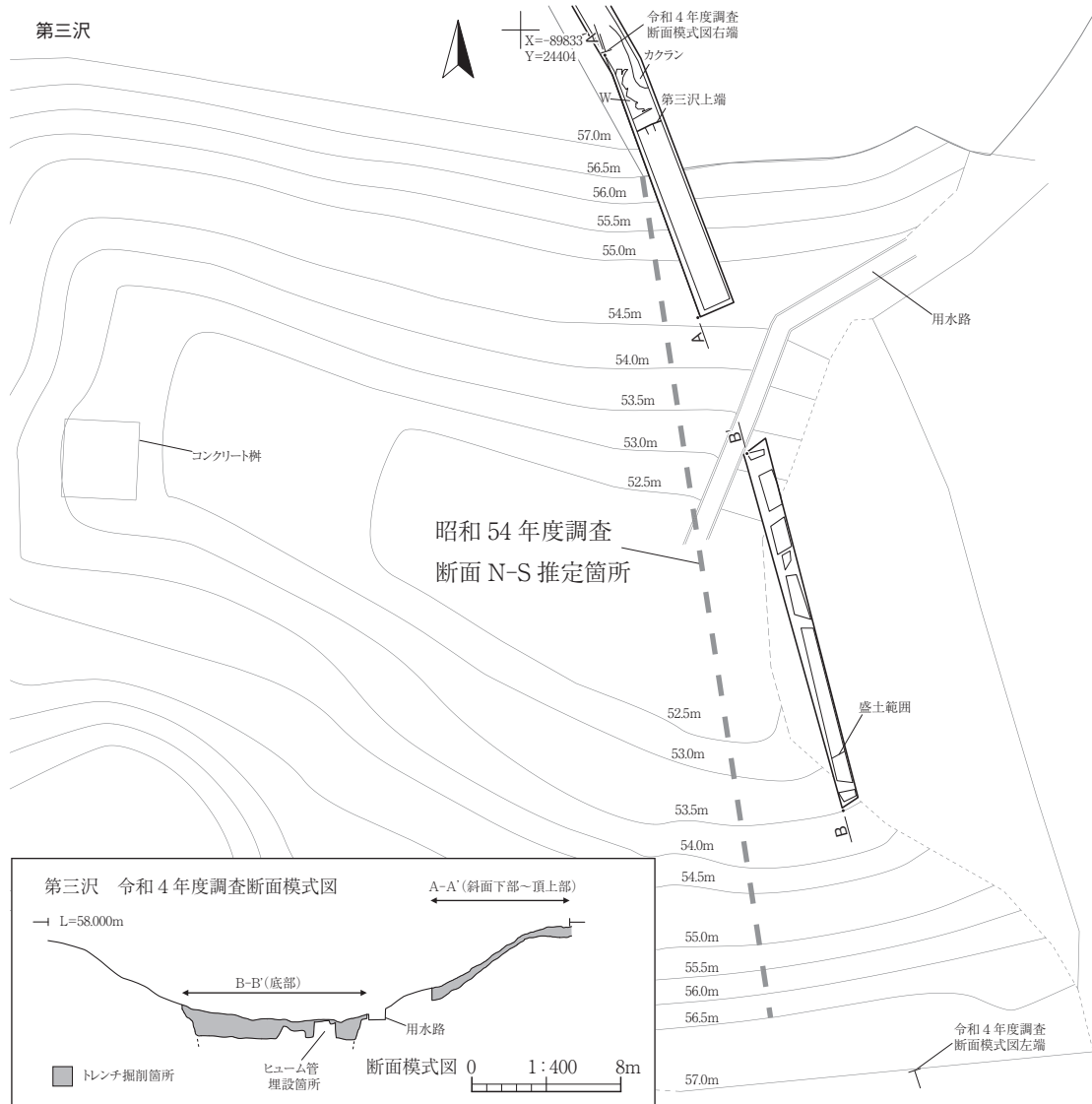
〈形状・規模〉遺構は西側に延びるが、西側は旧金ヶ崎中学校跡で埋め立てられ、地表面では判別がつかない。頂上部と底部との比高は約5.2mある。断面形は逆台形で、約30～35度の角度で立ち上がる。底部トレンチでは、地表面から約1.3m掘り下げたが、崩落の恐れがあり、途中で止めている。

〈堆積土〉斜面部では、中腹から下部にかけて用水路埋設による造成で大きく改変されている。斜面上部では、表土下層に黒色土(Ⅱ層)(A-A' 3層)、下部では、Ⅱ層に似た礫の混入する黒褐色土(A-A' 4層)が観察でき、現代の人為的改変以外は認められない。底部付近では、地中のヒューム管埋設による大規模な改変が行われていることが判明した。ボーリングで底面の把握を試みたが、底面まで達しなかったことから、少なくともさらに深さ30cm以上改変の影響が及ぶものと推測する。南側の斜面部への変換点付近で、僅かながら礫の混入する黒褐色土(B-B' 3～6層)が観察できた。

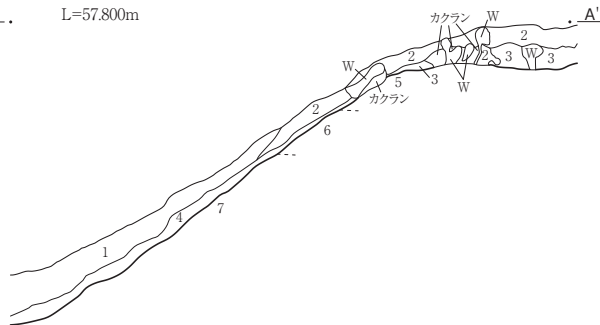
〈遺物〉過去の調査で、土師器、須恵器、鉄製品、手づくねかわらけ、陶器が出土。今回は出土なし。

〈備考〉鳥海柵見取図(第3図)では二の丸と三の丸を区画する第三濠にあたる。



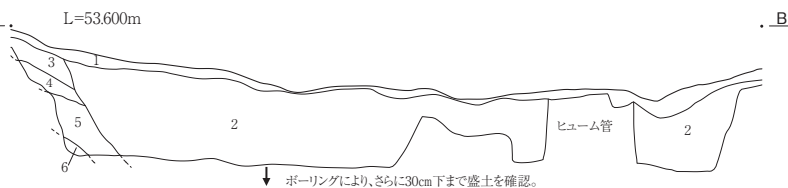


A. L=57.800m



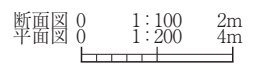
- 第三沢 A-A' (斜面下部～頂上部)
- 1 用水路工事の際の盛土
  - 2 10YR3/1 黒褐色土 粘性やや弱 しまり疎 現表土 I層
  - 3 10YR2/1 黒色土 粘性中 しまり中 II層  
上部の平坦面に厚く堆積する
  - 4 10YR3/1 黒褐色土 粘性中 しまり中～やや疎  
基本的には3層に似るが、やや3層より色調が薄い  
下部では2～3cm大の礫を含む
  - 5 10YR7/8 黄橙色結質土 粘性強 しまり密 IIIa層
  - 6 10YR7/2 に近い黄橙色結質土 粘性強 しまり密 IIIb層
  - 7 10YR4/3 に近い黄褐色土 砂礫 粘性なし しまり密 VI層

B. L=53.600m



第三沢B-B' (底部)

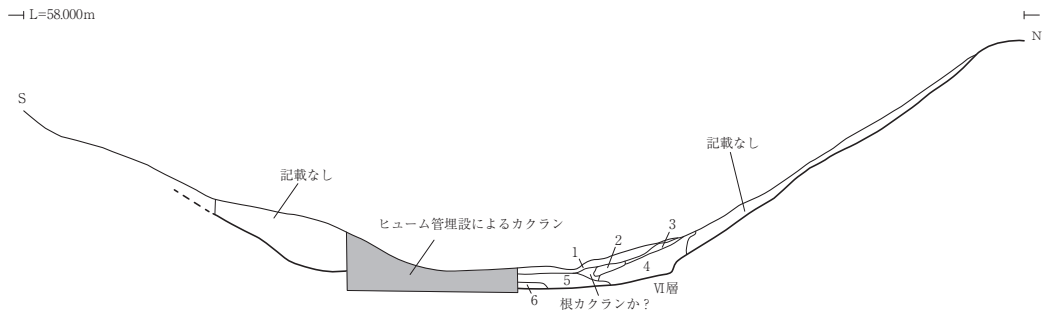
- 1 10YR3/1 黒褐色土 粘性中 しまり やや疎 現表土 I層
- 2 盛土
- 3 10YR3/2 黒褐色土 粘性中 しまり中  
2～3cm大の小礫を2%含む
- 4 10YR3/1 黒褐色土 粘性やや強 しまりやや密  
5～10cm大の礫を10%含む
- 5 10YR3/1 黒褐色土 粘性やや強 しまりやや密  
2～3cm大の小礫を10%含む 基本は4層に似る
- 6 10YR3/2 黒褐色土 粘性強 しまり密  
1cm大の砂礫が多量に混入



第10図 第三沢 (1)

(1) 西根遺跡

昭和54年度調査  
断面 N-S



- 1 現表土で草根を多量に含んだ黒褐色土で、粘性が強い。一部、小礫の混入が見られる。
  - 2 3層における黒褐色土と小礫も含む砂礫とが量的に逆転し、しまりが無い。
  - 3 法面から崩落した黄褐色粘土と小礫を多量に含んだ黒褐色土であり、粘性が強い。
  - 4 小礫から拳大礫を少量含む泥炭土。
  - 5 小礫から拳大礫が主体となる砂礫層であり、若干グライ化している。
  - 6 細粒砂層であり、泥炭化した部分とまだ、泥炭化しない部分とが入り混じっている。
- ※報告書掲載図で不明な部分を補うため、原図を基に再トレース。  
土層は、原図と本文の注釈の記載を基に再検討し、一部、加筆・修正。  
レベル値・縮尺は、原図より復元。

断面図 0 1:200 4m

昭和54年度調査  
断面写真



(財)岩手県埋蔵文化財センター 1981)より引用

第11図 第三沢(2)

柱穴状土坑 P1 (第12図、写真図版5)

〈位置・検出状況〉南側調査区のX=-89812、Y=24395付近に位置する。黒色土の円形プランとして検出した。検出面はⅢa層上面である。

〈形状・規模〉平面形は楕円形である。壁はⅢa層を掘り込み、直立気味に立ち上がる。規模は16×18cm、深さ10cmである。

〈堆積土〉地山ブロックを含んだ黒色土が主体である。

〈遺物〉なし。

〈時期〉詳細な時期は不明。

柱穴状土坑 P2 (第12図、写真図版5)

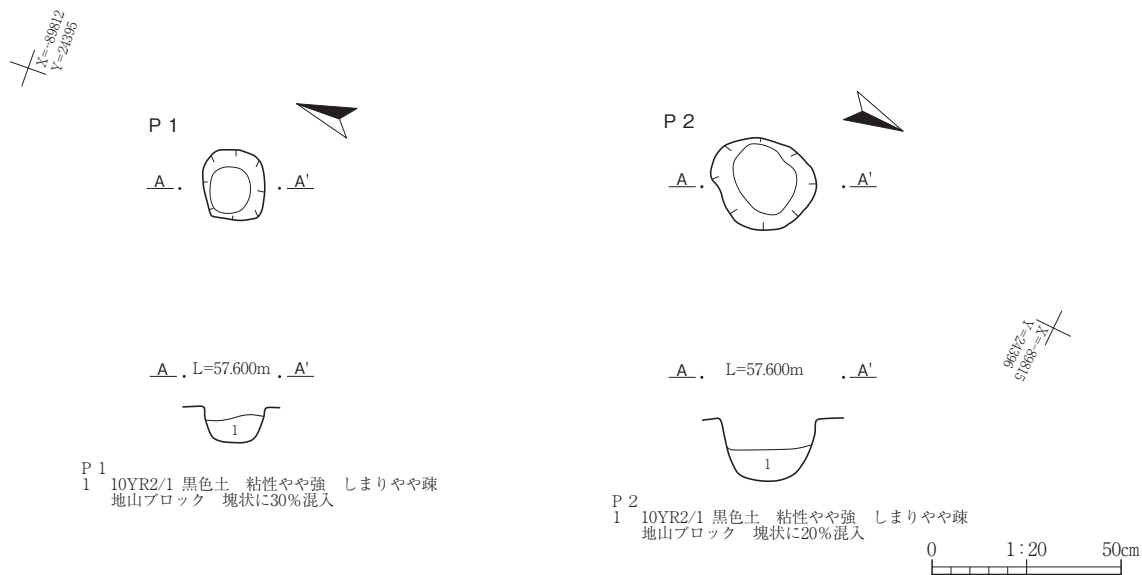
〈位置・検出状況〉南側調査区のX=-89815、Y=24396付近に位置する。黒色土の円形プランとして検出した。検出面はⅢa層上面である。

〈形状・規模〉平面形はやや歪な円形である。壁はⅢa層を掘り込み、直立気味に立ち上がる。規模は27×24cm、深さ17cmである。

〈堆積土〉地山ブロックを含んだ黒色土が主体である。

〈遺物〉なし。

〈時期〉詳細な時期は不明。



第12図 柱穴状土坑 P1・P2

## 6 まとめ

今回の調査では、北側調査区で、SDⅢ堀とBf-5溝の西側の続きを検出した他、南側調査区では、柱穴状土坑2個を検出した。第三沢では、トレンチ調査により、人為的痕跡の確認を行った。

SDⅢ堀は、過去の調査で、この堀を境に北側と南側で見つかる遺構の性格が異なる点から堀の南側にある奈良時代の古墳区域（墓域）を区画する意図があった可能性が指摘されている（（財）岩手県埋蔵文化財センター 1981）。鳥海柵見取図（第3図）によると、古墳区域は、南側を第三沢（濠）、東側を段丘崖、北側と西側をL字状の堀で区画され、四方を囲まれて図示されている。SDⅢ堀は、西側へ延びることから、このL字状の堀の可能性がある。時期は、少なくとも鳥海柵が存続する平安時代中頃までには形成されていたと推測する。

第三沢については、トレンチ調査により、現代の人為的な改変以外認められなかったことから、従来からの指摘のとおり、自然の沢跡を活かし、堀として使用していた可能性がある。

新たに検出した柱穴状土坑2個については、時期不明である。ただし、昭和54年度調査時に第1号墳と第2号墳の周辺から同様の規模と埋土の柱穴状土坑が118個検出されていることから、本遺構も類似する遺構である可能性が高いと判断する。

なお、西根遺跡の令和4年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

## 〈引用・参考文献〉

- 岩手県教育委員会 1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—X— 金ケ崎地区』岩手県文化財調査報告書第59集
- 金ケ崎町教育委員会 1968『西根古墳と住居址』金ケ崎町文化財調査報告書第1集
- 2012『平成二十三年度前九年合戦・安倍氏研究事業 資料 安倍氏のうつわ検討会』
- 2013『鳥海柵跡 平成22・23年度（第18・19次）発掘調査報告書』金ケ崎町文化財調査報告書第70集
- 草間俊一・金ケ崎町教育委員会 1959『金ケ崎町西根遺跡』
- 草間俊一 1960「岩手県のチャシと鳥海柵」『岩手史学研究』No.33
- 1962「金ケ崎町西根遺跡—第四次調査を中心に—」『岩手史学研究』No.39
- （財）岩手県埋蔵文化財センター 1981『金ケ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書（I）水沢市 玉貫遺跡 金ケ崎町 西根遺跡』岩手県埋蔵文化財センター文化財報告書第18集
- 樋口知志 監修・浅利英克・島田祐悦 著 2022『安倍・清原氏の巨大城柵—鳥海柵跡・大鳥井山遺跡—』吉川弘文館

(1) 西根遺跡



調査区 遠景（東から）



調査区 近景（北西から）



北側調査区 全景（直上から）



南側調査区 全景（直上から）

(1) 西根遺跡



南側調査区 現況 (南東から)



南側調査区 現況 (北西から)



南側調査区 (第三沢付近) 現況 (北西から)



基本層序 (北東から)



SDⅢ堀・B f - 5溝 全景 (北西から)



SDⅢ堀 (南側) 断面 (北東から)



SDⅢ堀 (北側)・B f - 5溝 断面 (北から)



SDⅢ堀 (北側) 断面 (南東から)

写真図版3 調査区現況、基本層序、SDⅢ堀・B f - 5溝



北側 全景 (南東から)



北側 断面 (北東から)



北側 断面 (北東から)



南側 全景 (南から)

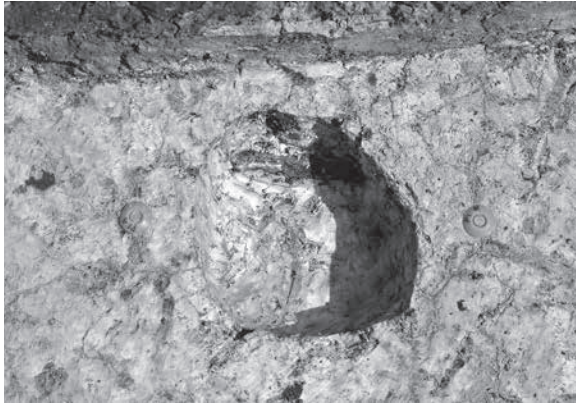


南側 全景 (北から)

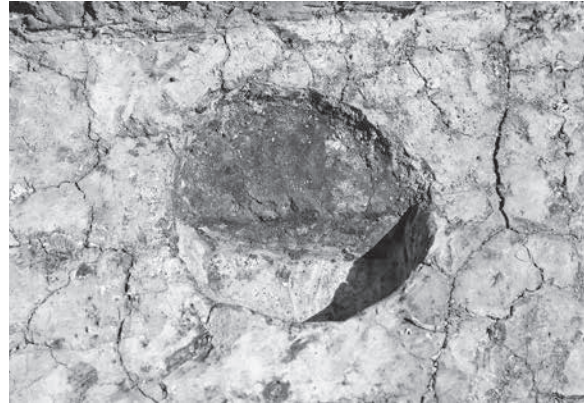


南側 断面 (東から)

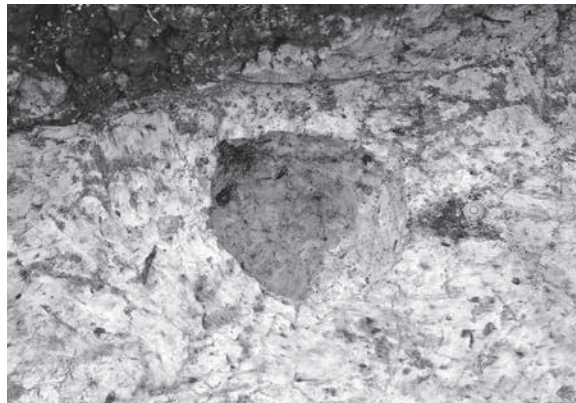
(1) 西根遺跡



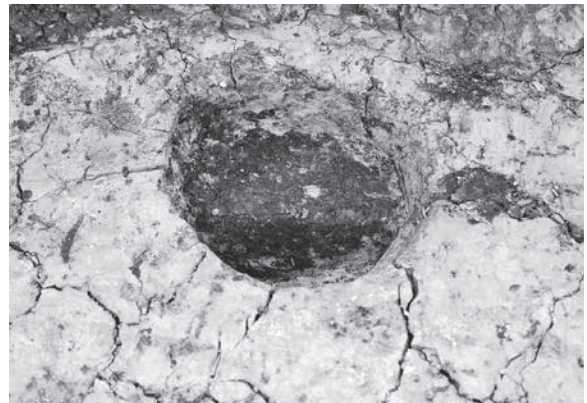
P 1 全景 (南西から)



P 1 断面 (南西から)



P 2 全景 (北東から)



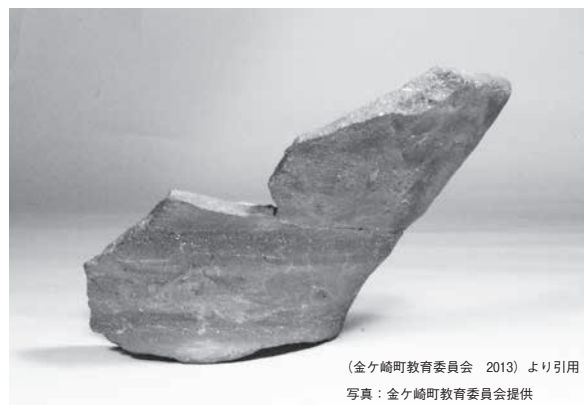
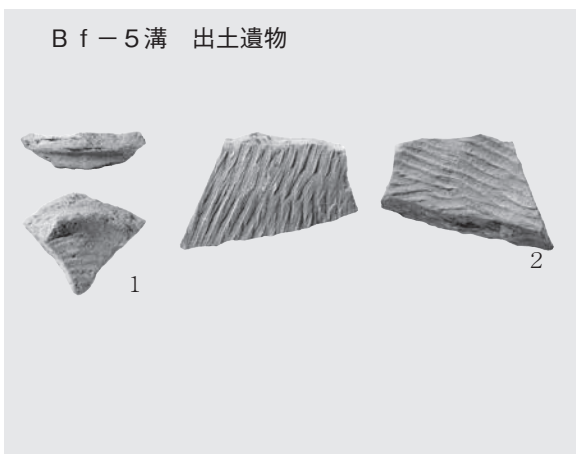
P 2 断面 (北東から)



北側調査区 作業風景 (東から)



南側調査区 作業風景 (北西から)



(金ヶ崎町教育委員会 2013) より引用  
写真: 金ヶ崎町教育委員会提供

参考資料 SD III 堀出土遺物

写真図版 5 柱穴状土坑、作業風景、出土遺物



## II 発掘調査概報

#### 凡 例

- ・遺跡位置図は、1: 50,000である。国土地理院2001『数値地図－岩手』を使用した。
- ・本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。
  - 大コンテナ：42×32×30cm
  - 中コンテナ：42×32×20cm
  - 小コンテナ：42×32×10cm
- ・本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。  
(例) 竪穴住居跡→竪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

## (2) <sup>なかばやしした</sup>中林下遺跡

所在地 奥州市水沢真城字中林下94-1ほか  
 委託者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所  
 事業名 一般国道4号水沢東バイパス  
 発掘調査期間 令和4年5月9日～7月29日  
 調査終了面積 2,756㎡  
 調査担当者 杉沢昭太郎・野中裕貴・進藤丈嗣  
 主要な時代 古代・中世



### 遺跡の立地

遺跡は奥州市水沢真城地区にあり、西側の河岸段丘から流れ下った大深沢川の南岸に立地する。調査前の現況は水田で、標高は40～41mである。調査地点は遺跡の西端付近にあたる。

### 調査の概要

検出遺構は、9～10世紀代の掘立柱建物6棟、竪穴状遺構2棟、土坑7基、溝3条、性格不明遺構3基、12世紀後半頃とみられる掘立柱建物1棟、土坑1基、溝1条、16世紀後半及びそれ以降の掘立柱建物2棟、土坑3基、溝2条、性格不明遺構1基である。

遺物は、9～10世紀頃の土師器・須恵器が大コンテナ7箱、柱材など建築部材が大コンテナ5箱、瓦3点、緑釉陶器2点、12世紀後半頃の陶磁器が大コンテナ1箱、かわらけ3点、他に銭貨1点が出土した。

隣接地で実施された令和2・3年度の調査で検出された遺構数も合わせると、平安時代の掘立柱建物は40棟に達する。それに対し、竪穴住居及び竪穴状遺構は合わせても7棟のみであることから、この地域の一般的な集落とは異なる様相を呈している。古代城柵胆沢城と何らかの関連を持って成立した可能性が考えられる。

12世紀後半の遺物はこれまでの調査でも出土していたが、遺構は未確認であった。今年度は、この時期の遺構が初めて見付き、周辺部へも広がると予想される。遺物には、中国産白磁、渥美・常滑産陶器、かわらけがあり、単なる集落ではなく奥州藤原氏と強い結びつきを有していたと想定される。



平安時代の掘立柱建物（東から）



平安時代の遺物出土状況（北から）

### (3) サンニヤⅢ遺跡

所在地 九戸郡洋野町種市第25地割40番地1ほか  
委託者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
事業名 三陸沿岸道路（侍浜～階上）洋野種市IC  
発掘調査期間 令和4年4月7日～8月10日  
調査終了面積 5,242㎡  
調査担当者 溜 浩二郎・福島正和・村田 淳・袖林 清  
主要な時代 縄文



#### 遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場から西約1.5kmに位置し、川尻川右岸に立地する。遺跡中央部は谷底、南北端は傾斜面となっている。今回の調査区は洋野種市ICの北側4,674㎡と南側568㎡の合計5,242㎡の調査面積で、標高は48～65mである。調査前の現況は北側が主に山林、南側は造成による盛土で覆われていた。

#### 調査の概要

検出遺構は、陥し穴状遺構12基、土坑6基、集石遺構1基、炭窯1基である。出土遺物は縄文土器が小コンテナ1箱、石器小コンテナ0.5箱で、いずれも調査区北側で見つかった。遺構の検出状況からこれまでの調査と同様、縄文時代の狩猟場の一部と考えられる。



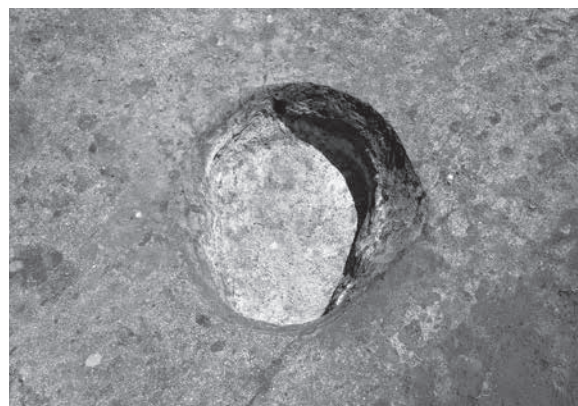
調査区全景



調査区北側



陥し穴状遺構調査風景



土坑完掘状況

#### (4) <sup>あまがさわ</sup>天ヶ沢遺跡

所在地 花巻市東和町砂子2区地内  
 委託者 岩手県南広域振興局農政部  
 事業名 経営体育成基盤整備事業（砂子地区）  
 発掘調査期間 令和4年9月1日～11月30日  
 調査終了面積 3,000㎡  
 調査担当者 福島正和・小山内 透・進藤丈嗣  
 主要な時代 弥生・平安



#### 遺跡の立地

遺跡は、JR釜石線晴山駅より南約3kmに位置する。谷状地形に挟まれた東から西へと延びる段丘縁辺に立地し、標高は約177mである。調査前までは、3面の水田であった。高地部分は削平されていたが、低地部分は良好に残存していた。次年度は、さらに西側2面の水田を調査する見込みである。

#### 調査の概要

検出遺構は、平安時代の竪穴住居2棟分の煙道・煙出し、時代不明の陥し穴状遺構1基、弥生時代から近世にかけて自然埋没した東から西へ向けて延びる沢1条である。

出土遺物は、沢下層から弥生時代中期の土器大コンテナ12箱、石器中コンテナ2箱、さらに碧玉製管玉1点が出土した。沢上層からは9・10世紀の土器が大コンテナ1箱出土した。

沢の出土遺物から、削平された周辺域に弥生時代中期や平安時代の居住域が近在していたものと想定される。



航空写真（東から）

## (5) <sup>たきおおがみ</sup>滝大神 I 遺跡

所在地 花巻市東和町砂子2区地内  
委託者 岩手県南広域振興局農政部  
事業名 経営体育成基盤整備事業（砂子地区）  
発掘調査期間 令和4年8月1日～9月29日  
調査終了面積 782㎡  
調査担当者 福島正和・小山内透・進藤丈嗣  
主要な時代 弥生・近世



### 遺跡の立地

遺跡は、JR釜石線晴山駅より南約3kmに位置する。北から南へ向け延びる舌状台地縁辺に立地し、標高は約175mである。調査前は水田であった。南側は全面的に削平されていたが、低地部分には及んでいなかった。以前には隣接する地点が旧東和町教育委員会によって調査されており、弥生時代前期を中心とする遺構・遺物が確認されている。

### 調査の概要

検出遺構は、近世と考えられる掘立柱建物2棟・溝1条・水田1箇所、弥生時代の遺物包含層1箇所である。

出土遺物は、遺物包含層から出土した弥生時代前期の土器中コンテナ1箱、石器小コンテナ0.5箱である。また、遺構外で近世陶磁器細片3片が出土している。

今回の調査では弥生時代の生活に直結する遺構を見出すことはできなかったが、弥生時代前期の集落エリア内に位置するものと思われ、集落内で使用された遺物の一部が遺物包含層より出土したものとみられる。また、掘立柱建物は近世民家とみられ、農村風景が広がっていたものと考えられる。



航空写真（上が北）

## (6) 境遺跡、山下遺跡

所在地 奥州市江刺稲瀬字山下245番地ほか  
 委託者 岩手県南広域振興局土木部  
 事業名 地域連携道路整備事業 主要地方道一関北上線山下地区  
 発掘調査期間 令和4年10月3日～11月28日  
 調査終了面積 1,234㎡  
 調査担当者 溜浩二郎・野中裕貴・進藤丈嗣  
 主要な時代 縄文・平安



### 遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線六原駅の北東約2.3kmに位置し、北上川左岸に広がる沖積面に立地する。事業に関連した発掘調査は平成元・2年度に北上市立照岡小学校校地の南東隅隣接地において南北170mの区間を実施しており、今回の調査はそこより、約100m南東側に位置する。現況は宅地跡および畑地等で標高は49m前後を測る。

### 調査の概要

検出遺構は、竪穴住居1棟、土坑2基、溝2条、柱穴状土坑2個、焼土遺構1基である。遺構の主な帰属時期は出土遺物から平安時代前期である。焼土遺構のみ帰属時期を示す遺物を伴っておらず詳細は不明だが、層位的観点から縄文時代に属する可能性がある。

出土遺物は、古代の土師器・須恵器が中コンテナ3箱と土錘1点で、調査区南西部の竪穴住居や溝およびその周辺から集中して出土した。このほか調査区全体で数点の縄文土器片と石器を採集したが、遺構に伴うものではなく、散発的な出土である。

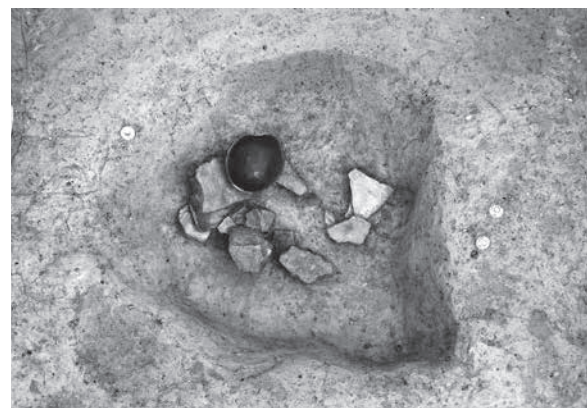
平安時代の遺構・遺物の分布範囲は、今回検出した竪穴住居より西側の調査区域外に広がっていると推測される。



調査区全景（南西から）



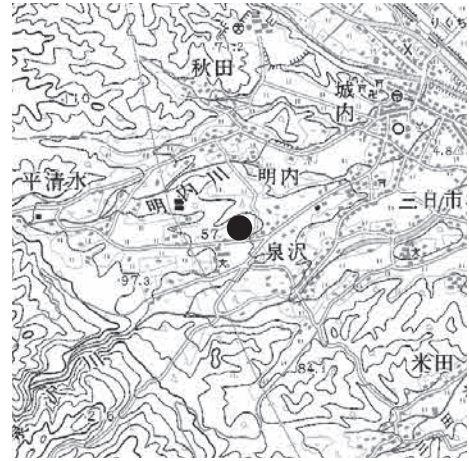
竪穴住居全景



竪穴住居内出土遺物

## (7) <sup>なかたい</sup>中平遺跡

所在地 九戸郡野田村大字野田第22地割138番地 1  
委託者 野田村  
事業名 野田小学校整備事業  
発掘調査期間 令和4年4月7日～11月11日  
調査終了面積 8,260㎡  
調査担当者 村木 敬・須原 拓・小山内 透  
主要な時代 縄文・古代



1:50,000 陸中野田

### 遺跡の立地

遺跡は、野田村役場から南西約1.3kmに位置し、明内川と泉沢川に挟まれた標高約40～50mの丘陵上に立地している。今回の調査区は、昭和29年に県指定史跡「野田竪穴住居跡群」として登録された史跡範囲の北東側にあたる。調査前は畑地であった。

### 調査の概要

検出遺構は、縄文時代早～前期の竪穴住居7棟、土坑2基、陥し穴状遺構2基、縄文時代中～後期の土坑1基、陥し穴状遺構36基、平安時代の竪穴住居44棟、掘立柱建物1棟、土坑32基、時期不明の掘立柱建物1棟、焼土遺構2基、柱穴状土坑32個である。出土遺物は、縄文土器ビニール小1袋、土師器大コンテナ12箱、縄文石器ビニール小1袋、礫石器中コンテナ24箱、石製品1点、土製品小コンテナ1箱、鉄製品80点、鉄滓小コンテナ2箱、羽口小コンテナ1箱、琥珀20点、貝類中コンテナ4箱などである。

今回の調査では、昨年度に引き続き、縄文時代前期と平安時代の集落、縄文時代中～後期の狩猟場が広がることを確認している。

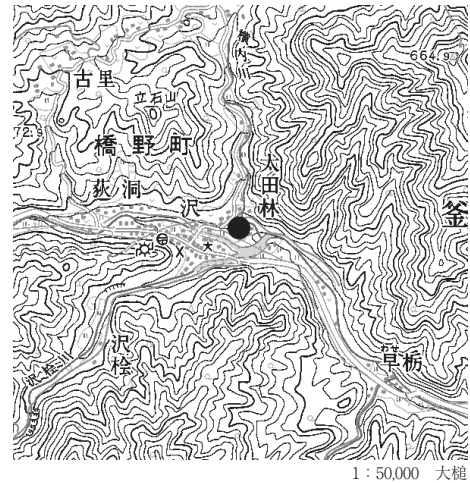


調査区全景



おおたばやし  
(8) 太田林遺跡

所在地 釜石市橋野町第38地割34番地1・36番地1  
 委託者 釜石市  
 事業名 橋野地区消防屯所建設事業  
 発掘調査期間 令和4年6月6日～11月30日  
 調査終了面積 567㎡  
 調査担当者 八木勝枝・村田 淳  
 主要な時代 縄文



### 遺跡の立地

遺跡は、鵜住居川左岸砂礫段丘上の標高約157m地点に立地する。調査前の現況は畑地で、それ以前は水田として利用されていた。

### 調査の概要

検出遺構は、竪穴住居24棟、貯蔵穴等の土坑25基、柱穴状小土坑215個である。竪穴住居は早期中葉の円形竪穴住居及び前期の方形及び大型竪穴住居で構成されている。

出土遺物は、土器大コンテナ39箱、石器中コンテナ23箱、土偶等土製品小コンテナ1箱、玦状耳飾等石製品小コンテナ1箱、炭化堅果類、焼骨である。土器の主な時期は縄文時代前期で、縄文時代早期・晩期、弥生時代が少量含まれている。

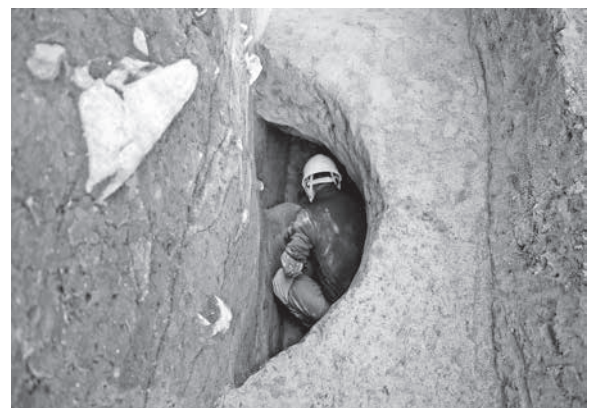
縄文時代早期中葉から前期末の竪穴住居は高い密度で重複した状態で検出された。前期大型竪穴住居の長軸方向は、調査区東側及び西側では概ね東西、中央では南北を示している。本報告調査区の南側は来年度調査予定区で、引き続き集落構造の確認を進める。出土遺物で特筆すべきは玦状耳飾である。前期竪穴住居床面近くから、完成品・破損品だけでなく素材剥片や製作工程を復元できる資料が複数出土しており、集落内で玦状耳飾製作が行われていた可能性を指摘できる。



遺跡遠景（南から）



調査区全景（上が北）



貯蔵穴調査状況

## (9) <sup>おかだ</sup>岡田遺跡

所在地 北上市村崎野第12地割地内  
委託者 北上市  
事業名 北上北部産業業務団地造成事業  
発掘調査期間 令和4年4月6日～11月30日  
調査終了面積 50,000㎡  
調査担当者 村上 拓・北村忠昭・川又 晋・北田 勲・  
杉沢昭太郎・八木勝枝・溜 浩二郎・富川 悟・  
袖林 清・進藤丈嗣  
主要な時代 旧石器・縄文・平安



### 遺跡の立地

遺跡は JR 村崎野駅の北西約 2 km に位置する。今次調査の対象は岩手県立中部病院の北北西約 600 m の地点である。立地面は和賀川左岸の村崎野中位段丘に相当し、北側を東流する大堰川に伴う低地、南側をその支沢が埋没した低地に区切られ、概ね東西方向に延びる尾根状の微高地となっている。

### 調査の概要

検出遺構は、旧石器時代石器集中地点 1 箇所、縄文時代竪穴住居 3 棟、陥し穴状遺構 324 基、土坑 17 基、平安時代竪穴住居 15 棟である。このほか現時点において帰属年代検討中のものとして、大形竪穴遺構 1 棟、竪穴状遺構 4 棟、掘立柱建物 1 棟、井戸 1 基、土坑 5 基、溝 1 条を検出している。出土遺物は、旧石器（石刃含む）約 100 点、縄文土器（早期～中期及び晩期）小 1 箱、剥片石器（石鏃・石匙・削搔器類）小 1 箱、礫石器中 1 箱、平安時代土師器・須恵器中 7 箱である。

縄文時代の陥し穴状遺構の分布は調査区のほぼ全域にわたるが、特に東部～中央部に密である。複数がまとまって並列し、同地点に再配置（造り替え）される事例も確認している。全体的には頂部への求心的な配置傾向が看取されるが、南北それぞれの斜面部にも特定の集中箇所がみられた。地形と配置の対応関係からは設置者の意図をくみ取ることができ、陥し穴の実態を考察・復元するのに良好な資料となろう。平安時代の竪穴住居は東部の頂部～南側斜面部に分布し、特に斜面裾部に多い。埋土に十和田 a テフラを挟み、上屋根材とみられる炭化材を伴うものもある。平安時代の遺物はほぼ全てが竪穴住居からの出土であり、土器には墨書・刻書を持つ資料を含む。なお、次年度以降は今次調査区よりさらに西側の区域の調査が予定されており、全容のさらなる解明が期待される。



調査区全景（南東上空から）



多数の陥し穴状遺構（東部頂部）

## 報告書抄録

ふりがな	れいわよねんどはくつちようさほうこくしょ							
書名	令和4年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第741集							
編著者名	野中裕貴							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2023年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしねいせき 西根遺跡	いわてけん 岩手県 かねがきちよう 金ヶ崎町 にしねたてかいどう 西根縦街道 みなみほらぞみした 南・原添下 ほか	03381	ME96-2095	39度 11分 25秒	141度 6分 57秒	2022.08.01 ～ 2022.09.30	200㎡	一般国道4 号金ヶ崎拡 幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西根遺跡	集落跡	奈良・平安	堀 溝 沢(堀か)	1条 1条 1条	土師器、須恵器			
		時期不明	柱穴状土坑	2個				
要約	<p>今回の調査では、昭和54年度調査区の西端にあたる南北2箇所を調査した。北側調査区では、前回調査で確認した堀と溝の続きを検出した他、南側調査区では、新たに2個の柱穴状土坑を検出した。北側調査区で検出した堀は、奈良時代の古墳区域を区画する堀であった可能性があり、西側へ延びることが改めて明らかとなった。第三沢については、トレンチ調査を行い、現代の人為的改変以外認められなかったことから、従来からの指摘のとおり、自然の沢跡を堀として活かしていた可能性がある。</p>							

\*緯度・経度は世界測地系(2011)による数値である。

---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第741集

## 令和4年度発掘調査報告書

印刷 令和5年3月17日

発行 令和5年3月24日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地  
電話 (019)638-9001  
FAX (019)638-8563

発行 (公財)岩手県文化振興事業団  
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号  
電話 (019)654-2235  
FAX (019)625-3595

印刷 大更印刷株式会社  
〒028-7111 岩手県八幡平市大更21-16-9  
電話 (0195)76-2514